様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２３日現在

機関番号：５２２０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22531046
研究課題名（和文）　論述文における適切な単語使用のための教材開発と指導法の研究

研究課題名（英文）　The Development of Learning Materials that help Students to use Appropriate Wording in Dissertations and the Study of Teaching Methods

研究代表者
井上　次夫（INOUE TSUGIO）
小山工業高等専門学校・一般科・教授
研究者番号：30342463

研究成果の概要（和文）：論述文で適切な単語が使用できることを目的に、話しことばから書きことばへの書き換え能力を高める教材を開発し、冊子『アカデミック・ジャパニーズ表現の演習』（Ａ４版、４２ページ）を発行した。また、それを用いて、高専の３年生及び専攻科１年生、公立高校２年生を対象に授業実践し、自学自習にも役立つ多様な練習問題を中心に据えた語彙の指導法について提案した。

研究成果の概要（英文）：With the aim of helping students to use appropriate wording in dissertations, I developed learning materials that improve their ability to convert spoken language into its correct written form and have published a booklet entitled “Exercises in Academic Japanese Expressions.” I implemented experimental classes using this booklet. Through these lessons, I have provided suggestions on ideal methods of teaching vocabulary whereby a wide range of exercise questions are set with an eye on facilitating students’ self-learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学、教科教育学
キーワード：教材開発・書きことば・論述文・単語の文体

１．研究開始当初の背景

（１）日本語学の研究動向

日本語学において話しことばと書きことばの相違を研究対象として最初に取り上げたのは菊沢季生（1933）「国語位相論」『国語科学講座Ⅲ』であり、そこでは話しことばと書きことばの相違を位相的様式論として位置づけている。しかし、そこで中心的に扱われたのは性別や世代の違い、あるいは社会的

階層や職業の違いであり、話しことばと書きことばという様式的位相について大規模な言語資料調査（文学・論説文から約 30 万語、現代雑誌から約 10 万語、総合雑誌から約 5 万語の動詞の用例を採取）に基づき本格的な記述的研究を行ったのは国立国語研究所『動詞の意味・用法の記述的研究』（以下、宮島達夫 1972）と言える。

宮島達夫（1972）は、単語の文体について「俗語」「日常語」「文章語」の 3 分類を行ったが、その後、「日常語」の範囲が広いため、それをさらに「くだけた日常語」「無色透明な日常語」「あらたまった日常語」に下位分類し、単語の文体は計 5 分類として示されることとなった。また、田中章夫（1978）「語彙の様相」『国語語彙論』においては国立国語研究所（1955）『談話語の実態』の資料を用いて談話語と書きことばの頻度傾向に基づき、その位相差を示した。

一方、田中章夫（1981・1987）「接続の表現と語法」『日本語・日本文化』においては接続表現に関する文体差について「会話的」「話しことば的」「一般」「書きことば的」「文語的」という 5 分類を示している。

しかし、これまでの宮島達夫（1972）に始まる研究では単語の文体の総体面に重きが置かれ、話しことばと書きことばの比較・対照という観点は明確には見られず、一方、田中章夫（1981・1987）においてはその観点を持ちながらも、取り上げた一連の接続表現の文体差については根拠となる出現頻度等の基準が明示されておらず、実証性に問題があると言わざるを得ないものであった。

今世紀に入り、井上次夫（2009）「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』においては日本人学生及び外国人留学生の論文・レポートの執筆に際し、実用・教育の観点から、論説文における該当語の適否を判断できることを目的とする単語の文体 2 分類を提出している。井上次夫（2009）では、国立国語研究所による日本語大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下 BCCWJ（2008））の 4 つのうちの 2 つのサブコーパス（約 500 万語の白書コーパス、約 500 万語の Yahoo！知恵袋コーパス）を用い、そこに出現する単語数をデータとする単語文体の分類基準・方法を明示した上で具体例を全品詞にわたり示した。

このように、本研究開始当初、日本語学の位相研究では大規模コーパスを用いた単語文体が可能な研究段階を迎えていた。

（２）論述文教育の状況

①　日本語教育

日本語教育の現場において、外国人留学生へのアカデミック・ライティング（論文・レポート等の専門的な論述文の書き方）指導に関してみると、日本語教育テキストは論述文における不適切な単語と対応する適切な単語についてその対応表を示して説明を行ってはいるが、そのような単語の数は決して多くはなく、しかもそれらは断片的に示されており、任意の単語を前にその単語が論述文における使用に適切か否かの判断基準を明示していない状況であった。このため、論述文においてテキストに例語として挙げられていない任意の単語（例：たぶん）を使用しようとした場合、特に留学生は論述文におけるその単語の文体の適否判断に窮するという状況があった。

②　国語科教育

一方、国語科教育における小論文等の指導においても、日本人学生は指導者から小論文中での使用単語（例：大変な課題）が不適切で修正の必要があると指摘を受けるまで無自覚・無意識に使用していたという事例が少なからず見られる状況があった。また、実際の指導においても、個人の個別的な単語使用の問題として済ませられることが多く、そのような問題事例が体系的に取り上げられることはなく、場当たり的な指導に終始している状況が見られた。

（３）研究開始当初の背景

以上見てきたように、日本語学においては様式的位相研究が研究者個人の主観的な判断や、組織による紙媒体ベースによる 50 万語規模の単語調査から 500 万語規模の日本語コーパスの単語調査に基づく単語文体の研究が可能となっていた。一方、言語教育分野においては日本人学生のみならず外国人留学生の論文・レポートといった論述文作成（アカデミック・ライティング）の際の使用単語（論述文語彙）に関する指導上の問題点に目が向けられつつあった。

そのような論述文教育における問題点とその解決に役立つ日本語学の進展が本研究開始当初の背景にはあったのである。

２．研究の目的

（１）論述文での使用単語の実態

まず、研究の目的は、日本人の高校生または高専生（本科生・専攻科生）、大学生及び外国人留学生等の論述文の作成を行う学生が、実際の論述文執筆において話しことば、若者言葉、略語を始めとする不適切な単語を無意識、無自覚に使用している実態を明らかにすることである。

（２）教材開発と教材を用いた指導

次に、そのような問題状況の解決を図るため、これまでになかった学習教材を独自に開

発し、発行することである。そして、その開発教材を用いて実際に高専生等を対象に授業実践を行いその指導法について実践的に研究を行うことである。

具体的な目的としては以下の4点を挙げることができる。

① 単語文体リストの作成

論述文の作成に際しては、題目、論述内容、文章構成、論理的文章展開、文字・表記等のほか、使用語彙が的確であることが求められる。本研究では、使用語彙のうち特に単語の文体的特徴に注目する。そして、高校・高専・大学における国語科教育、また高専生・大学生・外国人留学生を対象とする日本語教育の論述文作成（アカデミック・ライティング）指導に際し、使用語彙の適否に役立つ「単語文体リスト（話しことばと書きことばの対照表）」を日本語大規模コーパスBCCWJ（2008）の使用単語調査に基づき作成することを第1の目的とした。

② 学習教材の開発・作成

上記①で作成した「単語文体リスト」を効果的に活用し、論述文で用いるものとしてふさわしい文体的特徴を有する単語（表現）の使用が問題なく行うことができる能力の育成を図るための学習教材を開発し、冊子教材として作成・発行を行うことが第2の目的である。

③ 学習教材を用いた指導法の研究

上記②で開発・作成した冊子教材を授業で用いて学生を対象とする論述文で使用する単語に関する指導を行う。その実践指導を通して効果的指導法の在り方について検討することが第3の目的である。

④ 開発教材の改訂

開発教材を用いた授業を実践し、実際に論述文の単語指導法を工夫する中で、学習者から感想、コメント等を得てフィードバックとして生かし、開発教材の有用性、効果を検討した後、改訂を行うことが第4の目的である。

３．研究の方法

（１）問題を含む単語の収集

① 論述文の収集

まず、問題となる単語の収集のために行うべきことは、学生が書いた論文・レポート等の論述文の収集を行う。

その入手先としては、研究代表者（以下、筆者）が勤務している小山工業高等専門学校に在籍する学生であり、その場合、既に書かれ筆者に提出された論述文に加えて、新しく彼らが執筆することになる論述文が主たる収集対象となる。また、以前に、筆者が収集していた外国人留学生による論述文に加えて、研究協力者が勤務する大学の外国人留学生によって書かれた論述文が収集対象となる。さらに、筆者が担当している他機関の授業科目の受講生である日本人大学生の論述文も収集対象として挙げることができる。

② 論述文に不適切な単語の収集

上記①で収集した論述文を順次、読み込みそこから論述文には不適切と考えられる単語・表現を逐次、拾い上げていく。不適切な単語の例としては、話しことば、若者言葉、流行語、略語、カタカナ語等であり、その範囲・具体例等の詳細については、井上次夫（2008）「小論文に適する表現・適さない表現」『日本語教育世界大会予稿集2』、「小論文に見られる言語表現上の諸問題」『平成20年度高専教育講演論文集』により予備的な調査研究を行っているため、この収集作業は順調に進行させることができる。

一方、単語の収集先としては上述した学生の用例以外に、国語辞典、類義語辞典、和英辞典、日本語教育または国語科教育用の教科書テキスト、指導参考書、関係論文のほか、『分類語彙表増補改訂版』等の先行文献から拾い上げた単語を加えることができる。

（２）対象単語のリストアップ

上記（１）で収集した単語のうち、本研究で取り上げる問題単語として対照する単語をリストアップする。その際の基準としては、当該単語と意味・用法が近似する単語（類義語）が存在するか否かを重視するが、使用頻度の多寡、基本語彙か否か等についても考慮する。

（３）単語文体リストの作成

日本語大規模コーパスBCCWJ（2008）のサブコーパス4種（白書、Yahoo!知恵袋、国会議事録、書籍）における対象単語の出現数調査の結果を用い、単語文体の相対化を行う（例：いろんな＜いろいろな＜さまざまな＜多様な＜多岐にわたる ※文体式の不等号の右辺の単語ほど単語文体の改まり度が高い）。

こうして、文体式で表示されるような単語文体リストを作成する。なお、表示形式としては次のようなものを提案している。表中の数字は、サブコーパス「白書」「Yahoo!知恵袋」の出現数を基に算出した単語文体値で、数値が高いほど文体の改まり度が高い。

表１　単語文体の表示形式

口頭体	準口頭体	準書記体	書記体
たんない 0	たりない 2.2	不足する3.2 欠ける 3.3	欠如する 4.3

たんない＜たりない＜不足する・欠ける＜欠如する

0　2.2　3.2　3.3　4.3

（４）単語指導教材の開発・改訂

上述した「単語文体リスト」を含む論述文で用いる単語（アカデミック・ワード）を指導するための冊子教材を開発する。そのためにはさまざまな問題の種類を準備し、また一定数以上の問題数を掲載することとした。

さらに、開発教材は実際に授業で使用し、学生からのフィードバックを得る。それを基に、教材の改訂に結びつける。同時に、指導実践の中で指導者が気づいた点を生かしてさらなる開発に役立てることとする。

（５）開発教材を用いた指導法の研究

開発教材は、主に高専３年生及び専攻科生を対象とする授業実践の中で使用しながら、指導法の研究を行うこととした。まず、論述文で用いるものとしては不適切な単語、または文字・表現を用いた文を学習者に示し、どのような問題点があるかを考えさせる。その後、それを確認しながら解説を行い、学習者に問題意識を持たせる。それから、練習問題に取り組ませた後、解答・解説を行い、次に、多種多様な演習を数多く行わせる。そのような動機付け、準備の後は、自学自習として取り組ませ、その学習及び教材についての振り返りを求める、という授業の流れである。

なお、配当時間数が多く取れるのであれば、学習者に考える時間を多く取り、解答の相互交流を行うことが有益である。

４．研究成果

本研究の成果としては、教材開発に基づく冊子教材の発行及びそれを用いた指導実践による冊子教材の改訂と指導法案の提出を挙げることができる。

（１）開発教材の発行及び改訂

まず、第一教材『単語の文体』（A4 版、18 ページ）を基に、第二教材『アカデミック・ワード演習－適切な単語文体を使用するために－』（A4 版、24 ページ）を今回、新たに開発した。本教材では適切な単語文体の使用に関する解説文、練習問題、演習及び解答例、学習後の感想・コメント欄を設けている。

第二教材は翌 2011 年度に筆者が担当した 3 年生の国語 2 クラス及び専攻科 1 年生の科目「日本語概説」の授業において使用し、それぞれの学生からフィードバックを得た。

次に、第二教材から得たフィードバックを生かして改訂したのが第三教材『アカデミック・ジャパニーズ表現の演習－論述文における適切な単語使用のために－』（A4 版、42 ページ）である。本教材は、論述文語彙についての理解を学習者が各自で深めることを目的として新たに論文「語の文体の分類法について」を掲載し、第一教材と比べるとページ数が大幅に増加した。また、第三教材では表紙にイラストを加えてカラー印刷にしたほか、「目次」を表紙の裏に移動させ、冊子教材としての体裁を整えた。図 1 に開発した冊子教材、図 2 には第三教材の目次を示す。

図１　開発した冊子教材

はじめに …… 1

１．問題のある文 …… 2

２．適切な単語文体の使用 …… 4

３．問題演習 …… 7

４．付録 …… 17

・論文

・単語の文体式（リスト）

・解答例

５．引用・参考文献 …… 41

あとがき …… 42

※裏表紙（学習後の感想・コメント欄）

図２　第三教材の目次

（２）指導法の提案

開発した冊子教材は、論述文における適切な単語使用能力の育成を図ることを目的とするため、学習者の現状の問題点への認識を導き、そこから練習、演習そして解答・解説を通しての能力向上を目標とした指導法を提案することが可能となった。第三教材を例に概要を示すと以下の通りである。

本指導案は夏季休業中に本教材を用いて学習者が自学自習を行うという年間計画の中に位置づけ、授業 2 時間（100 分）を配当するものである。

①　導入

まず、論述文として「問題のある文」を提示し、それを論述文にふさわしい文への書き換えを試みさせる。その際、その理由・根拠

も示させ、解答・解説を行い、論述文で使用する単語に意識を向けさせる。

② 展開

ここでは「アカデミック・ジャパニーズ」の意味を説明文により確認し、話しことばを書きことばに書き換える問題（例：ちょっと→少し、わずか）を始めとするさまざまな練習問題に取り組ませた後、解答・解説を行い論述文での使用単語の具体例について考えを深めさせる。

③ まとめ

演習問題の第１問に取り組ませ、冊子教材の付録にある解答例を見ながら答え合わせをさせるなどして自学自習の方法について習得させる。最後に、夏季休業中の課題範囲とすること、学習後の感想・コメント欄に記入ご亭主すること等を連絡する。

一方、筆者は県立高校に出向き２年生２クラスを対象に小論文への導入を目的とする公開授業（各１時間）を行った。このような単発的な投げ込み教材による指導法についても検討を行い、その結果、パワーポイントと冊子教材を組み合わせて行う指導法の可能性を示すことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 井上次夫、コーパスに基づく「語の文体」の明確化、白鴎大学教育学部論集、査読無、4 巻 1 号、2010、183－201

② 井上次夫、書きことばらしさの判断と測定、文部科学省研究費特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ予稿集、査読無、2011、89－96

③ 井上次夫、言語表現法の実践、白鴎大学論集、査読無、26 巻 1 号、2011、333－361

④ 井上次夫、国語学習の系統性(3)－書くこと、査読無、44 号、2011、1－10

〔学会発表〕（計８件）

① 井上次夫、単語の文体意識について－話しことばと書きことばの区別－、全国大学国語教育学会、2010.5.29、東京学芸大学

② 井上次夫、BCCWJ を用いた「語の文体」の分類、ICJLE 日本語教育学世界大会、2010.7.31、国立政治大学（台湾・台北）

③ 井上次夫、書きことばらしさの測定、日本漢字能力手検定協会・日本語教育研究所、第 23 回研究員研修会、2010.12.5、京都府民総合交流プラザ京都テルサ

④ 井上次夫、発生動詞の文体考－起きる・起こる・生じる・発生する、ICJLE 日本語教育学世界大会、2011.8.21、天津外国語大学（中華人民共和国・天津）

⑤ 井上次夫、類義語辞典の文体記述の検討－日本語コーパス BCCWJ に基づく文体値の観点から－、ICJLE 日本語教育学世界大会、2012.8.18、名古屋大学

⑥ 井上次夫、論文・レポートで適切な単語使用ができるための教材開発、全国高専教育フォーラム、2012.8.29、国立オリンピック青少年活動センター

⑦ 井上次夫、単語の文体判断について(2)－話しことばと書きことば－、全国大学国語教育学会、2012.10.28、富山大学

⑧ 井上次夫、様式的位相による類義語の使い分け－大学生の単語の文体判断調査から－、沖縄県日本語教育研究会、2013.3.1、琉球大学

６．研究組織

(1)研究代表者

井上　次夫（ INOUE TSUGIO ）

小山工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号：30342463

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：